

| | |
|------------------|---|
| Title | Maxwell H.H. Macartney and Paul Cremona; Italy's Foreign and Colonial Policy (1914-1937), 1938 |
| Sub Title | |
| Author | 山本, 登 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1938 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.32, No.9 (1938. 9) ,p.1281(131)- 1285(135) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19380901-0131 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19380901-0131 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

掘した文書などは、特に経済的に頗る重要性を保持する。

それ等の文書の中には、多くの経済的關係文書を発見すると共に、かゝる古代に於て、經濟上の各種契約を法律文書として作製し其確實性を充實せしめ得た當時の高度な社會的發達と共に、此程度に進んでゐた市民一般の經濟的地位と、其所に至る諸過程、並に斯る燦然たる文化が、其後其地域に於て突然と中斷し、或は、何故、他の東洋諸地方に殆んど多くの影響を及ぼさずに終つたか。是等の諸點こそ、眞にアジア的特質として重要な所なると共に、尙他の一般經濟史に於ても亦充分考察を必要とするものであらう。

フアラ市の遺蹟は、獨逸の東洋協會がデリツチェ教授指導の下に、一九〇二年に初めて發掘し、其後屢々行はれた。此出土品中、古い時代の部分は、多くトルコのイスタンブール博物館に所藏される。其一部分の二、三百個は獨逸のダイメル教授の手で發表され、尙一九三一年以後フィラデルフィア大學のクラマー教授が土耳其政府の許可を得て之を調査し、又フェルチュエ氏の手で目錄も發表された。

ラガシ市遺跡發見の文書には、ラガシ王朝末期西紀二七〇〇年代のルガルアンダ王及びウルカギナ王並に其后妃シャグ・シャグの宮殿關係往復文書があり、ハーヴァード大學のヒューゼー教授の手で發表された。譯文が無いので其謄寫によつて井上の解讀し得た範圍では、宮殿所屬の物資輸送、收納關係文書や、勞役者の支給記録など多く、中には粘土版の両面約二十欄三、四百行に及ぶ長文のものも尠なからず。且つそれに計算書の附いてゐるものも多々ある。

Maxwell H. H. Macartney and Paul Cremona;

Italy's Foreign and Colonial Policy (1914-1937), 1938.

山 本 登

伊太利宰相ムッソリーニ自身の言葉を借れば一九三六年五月エチオピア攻略の完成は伊太利の地位を所謂「満足國」或は「持てる國」の一にまで引上げたものであり、且つ又、それはフランス帝國乃至は第二ローマ帝國の創設を意味するものであつた。英・米・佛・蘇の諸列國に伍して伊太利が「満足國」としての實力を有するか否かは此の特殊語の持つ意義の解釋如何により自ら異なる所であり、更に又一定の實證的分析を俟つて始めて明らかとなる所である。然し兎も角最近に於ける國際情勢の變遷下に於て伊太利が日本或は獨逸と共に有力なる現狀打破派の一國として換言すれば新興勢力の一として活潑に活動し來り、又しつゝある事は否定し得ざる事實である。然かも世界大戰を通じ又大戰後に於て其の關係した一切の國際的問題に際し常に事志と反し戰勝國の一であり乍ら不遇の地位に陥れられた同國がフランス下の擡頭と共に漸次力強い回復の歩を進め遂に今日斯かる一勢力を築くに至る迄は對內的又對外的に誠に苦難の途であつたと云はなければならぬ。従つて本書に依り一九二四—三七年に亙る期間に就いて後者即ち伊太利の對外政策の變遷の跡を顧る事は頗る興味深きものがある。

伊太利の對外政策乃至植民政策は其の地理的狀勢の影響を蒙る事大なりと謂はれる。即ちアルプス大山脈を以て

Maxwell H. H. Macartney and Paul Cremona; Italy's Foreign and Colonial Policy (1914-1937), 1938. 一三一 (二二八一)

北方オーストリアと境し、其の支脈たるアペニノ山脈を支柱として南へ地中海に突出せる長靴形の半島は南端のシシリ島、西方のサルヂェニヤ島を含めて本土の面積十一萬平方哩、一平方呎の人口密度百三十六・八人(一九三六年)を示す誠に狹隘なる國土である。而して北部ポオ河流域のロンバルディア平原を除く以外、大部分は山脈丘陵地帯を以て蔽はれる結果、從來大體に於て農業國であり乍ら耕地に乏しく、従つて生糸、麻、小麥、オリブ油等の外顯著な産物を見出さず、更に鐵、石炭を始めとして重要な鑛産物資源を殆んど産出しないと云ふ如く原料資源供給上より見て極めて貧弱な状態を示してゐる。唯、最近に於ては北部のアルプス南斜面地方の水力電氣の開発利用により國內産業の工業化が促進される一方、政府による南部地方の荒蕪地開墾政策が着々と實績を挙げつゝある。然し何れにしても既述の稠密なる人口と原料資源の不足は伊太利をして積極的な對外活動乃至は植民活動を必然ならしめる有力なる原因を形成し、加ふるに地中海に面する所謂「地中海列國」の一たる事實は常に對外活動遂行の爲、惹いては同國の獨立保全の爲に地中海海權の確保を必要ならしめ、此の事が又伊太利の政治的、外交的動向を決定する上に終始強力作用を及ぼしたし又及ぼすと解される。されば本書に於て扱はれる期間に就ても常に問題は前述の伊太利の經濟的利害關係を基礎に主として地中海を中心とする列國の勢力關係の消長に見出されるのは蓋し當然である。

一九一四年七月塙・セ開戦を以て世界大戰の緒口が切られた時、伊太利は本來ならば一八八二年五月以來存續してゐた三國同盟の一員として當然塙國側に立つべきであつた。然し當時に於ては伊太利が最初此の同盟に参加した直接の動機であつた所の對佛對抗の必要は其後佛國との直接諒解により消滅して居つたし、又當時の伊太利としては地中海列國の建前から英國との友交關係を保持する事の必要を確認して居つた。そこで伊太利は種々なる口實を設

けて同盟義務の履行を拒み、武裝的中立の状態を持し乍ら暫らく日和見的態度を續け、其の間最も打算的に參戰代償に關する數次の交渉を先づ獨塙側と、次いで聯合國側と試み一九一五年四月のロンドン條約の結果、五月に至つて舊同盟側を敵として參戰を決意するに至つた。然し乍ら大戰中及直後の諸種の國際的情勢の變轉は多く伊太利にとつて不利な展開を見せ、例へば米國の參戰、帝政ロシアの崩壊、塙國の分裂等は何れもロンドン條約の効果を減殺するに役立つ、就中同條約が米國に對し公式に通告してなかつた事實は後に平和會議に於て米國大統領ウィルソンをして同條約の法的根據を論難する有力なる口實を提供する事となり、更に又大戰中一九一七年に英佛・伊間に結ばれ南アナトリア地方に於ける伊國の權益を是認したサン・ジアン・ド・マウリヌ條約も平和會議に於ては英佛の不信により無視された。

即ち、餘りに自國の利益追求に汲々たる伊太利の態度は列國の憤柝を買ひ平和會議に於て伊太利は全く虐待を受ける事となり、其の歐洲に於ける領土の分割に於ても又アフリカ大陸に於ける分割に際しても常に得る所は小であり、又不足原料資源獲得の要求さへ否定せられ、茲に伊太利は「不満足國」の地位に甘んずるを餘儀なくせられ、謂はゞ「其後暫くの間伊太利は歐洲諸列強國中、繼子の地位に置かれた」のである。

以上本書に於ては第一章の序論に次いで第二、第三兩章を通じて大戰の勃發當時より平和會議終了に至る迄の伊太利の對外政策を叙述し、次に第四章より第九章迄は各章別に伊太利と諸外國間の國際關係の推移を夫々取扱ふ。例へば第四章フィユーム問題、第五章對アルバニア及びユーゴスラビヤ關係更に順次、對佛、對獨、對英或は對小協商國及び對バルカン諸國關係等々である。今是れ等各章の内容に就いて詳述する餘裕を有たないが何れも伊太利の對外政策を中心に各國との國際政治的關係の經緯が可成り委しく叙述せられ、大戰後現在に至る迄、地中海列國

の一としての伊太利の歩んで来た道を種々の角度から眺める事が出来る。而かも其の間を通じ終始一貫して見られる事は平和會議後の伊太利が如何に經濟的政治的に行詰りを感じ、而して一九二二年十月ムツソリーニ統率下のフアシストの「ローマ進軍」以來、如何に積極的な活動を以て著々國力恢復を目指して進み來つたかの事實である。即ち既述の如く伊太利としては常に地中海列國の一たる實力を保持する事が第一目標であつたが其の事は又同時に世界列強國に伍しての國威發揚をも目指すものであつた。殊に伊太利の場合世界列強の一たり得る事の欲求は唯に對外的のみならず對内的意味からも強調された様に理解される。

而かも其の對外的部面に於ては如何にせば隣接の諸小國を抑へて、自ら英・佛の如き大國と列し得るか、主要關心事であり、先づ英國とは元來外交的なるを旨としたが、エチオピア戰役を通じて兩國の對立は激化し、更にスペイン内亂を圍つて其の不調は依然維持されるが、兎も角エチオピア戰役成功後の伊太利の國際的地位の向上は英國としても認めざるを得ない所であり、一九三七年一月の英伊地中海協定の締結は對等な政治協定として目されて居る。

又佛國に對しては常に均等勢力の確保を計り、一九三〇年ロンドン海軍軍縮會議失敗後の建艦競争は其の間の事情を最も良く語り、又一九三五年一月ローマに於けるラバール、ムツソリーニ會談の結果成立した佛伊新協定は既に對等となつた兩國の地位を示すに足るものと解される。更に又兩國はスペイン問題に關して明白な對立關係を示し現在に及んでゐる。伊太利は又其の反面に於て獨逸に對し夙に友誼的態度を以て臨み、それはヴェルサイユ條約の桎梏を脱せんとする獨逸に同條約に不満を持つ伊太利が必然的に同情と理解を寄せた結果と見られる。兩國は一九三四年夏ナチスのクーデターによるドルフス壤國首相暗殺事件に關し一時的な對立を見せた事もあつたが纏てベルリン・ローマ樞軸によるフアッシヨ戰線の結成に伴ひ、更に昨年末の日獨伊防共協定の締結と共に反共產主義の

旗印を明かに今や共に新興勢力の意氣を誇つてゐる。

更に本書に於ては第十章に於てムツソリーニの主張の一たる條約改訂論及一九三三年の四國協定の解説を與へ、第十一章伊太利と國際聯盟、第十二章伊太利と軍縮問題を取扱つた後、第十三章に於て伊太利の植民地活動を一括して叙述し、第十四章にフアシスト帝國の創設を説いて、第十五章伊太利の將來の目的を以て結論とする。

畢竟するに、エチオピア領有以後の伊太利の勢力はアフリカ大陸に於て又地中海に於て英國と比肩するに足る程の優位を誇るものであり、特に同國が新興勢力たる點に於て、現状維持に餘念ない英・佛の地位を脅かすものと謂はねばならない。殊に現在尙スペイン問題を圍つて一方に於てフランコ政權を支持する獨・伊のフアッシヨ戰線と他方に於てヴァレンシア政府を援助する佛・蘇の人民戰線間の激しい抗争が續けられ、更に亦、自國の利害關係より出發して不干渉委員會を指導する英國の介在が事件を益々複雑ならしめてゐる。更に現在世界を擧げて軍擴の奔流に押流されつゝある時、國際關係の推移は何時如何なる豫期せざる方向に動き出すとも計り難い。斯かる際に伊太利に關する限り對英或は對佛の均等勢力の要求と地中海上に於ける安全感確保が主目的となる事は否定出来ない。而かも近き將來に就て見るならば伊太利の對外政策乃至は植民活動には、益々強化が豫想せられ、より以上の進展が豫期せられる。

従つて、本書を通讀して大戰當時より現在迄の同國の對外活動の經過に就て一應の理解を持つ事はあながち必要ではなからう。唯、本書は各章夫々、獨立論文的に扱はれ、其の間相當に留意して年代的に排列されて重複を避け且つ相互の連絡を計つてはあるが、猶ほ充分組織的とは云ひ得ない憾みがある。而かも論ずる所誠に常識的であり、場所によつては政治的事件の羅列に過ぎぬ點もあるが、又それ支けに親しみ易い書でもある。